

## 家族はケアパートナー ～運営基本方針より～

〒790-0101 松山市溝辺町甲 94

【Tel】 089-977-8502 【Fax】 089-907-8504

【E-mail】 tomo-home@triton.ocn.ne.jp 【Home Page】 <http://www.tomo-home.jp>



## 吾も紅—サテライト型小規模多機能居宅介護事業所—の開設

総合施設長 永和淑子

小規模多機能ホーム第二ともの家（溝辺町甲564番地）がご近所の畑の一部でほうれん草や大根などの野菜をつくらせてもらっていました。その畑のおかげで外歩きと収穫が好きなお年寄りがどれほど助けられたことか、一石二鳥、三鳥位の役目を果たしていました。その御宅は高齢者世帯で、お元気な頃はお二人で野菜やキュウイやみかん・柿など農業を営まれていましたが、ご主人が体を弱くされ奥様も疲れてきたので関東に住む息子の所に行きたい、ついては家と土地をともの家で買ってもらえないかとの話をいただきました。全くのご好意で畑の一部を使わせていただいていたので理事長も思わず「買ってもいいですよ」との一言で話が進展し、ついに今年3月15日『小規模多機能ともの家吾も紅』の完成に至りました。不動産鑑定、売買契約、建築業者の一般入札と、体調不良ながら理事長が取り組みましたが、上棟式当日は当理事長の葬儀となってしまいました。棺を乗せた車がともの家各事業所を一巡し、最後に上棟された建物をみて火葬場にむかいました。永和良之助理事長の最後の仕事となったサテライト型小規模多機能居宅介護事業所は私の一存で『吾も紅』と名付けました。自分に恥じない生き方をせよと言いついて聞かせてくれた亡母の墓前で親不幸を詫び自分の決意を語る、すぎもとまさとの『吾も紅』の歌が私のイメージと重なりました。素朴な吾も紅の花。親への想い。子としての自立。

隣接する小規模多機能ホーム第二ともの家と吾も紅が、地域の憩いの場になることを願ってやみません。

## 介護ひまなし日記⑤

第二ともの家 永和 里佳子



ヒサコさんには、第二ともの家に「お父さん」がいる。

本当のお父さんは、10年前に亡くなった。それから、ヒサコさんはお父さんを探している。「一目でいいから会いたい」「掘り起こしてでも会いたい」「どうして私を置いて行ってしまったの」そう言って、お父さんを思い出しては一日に何度も涙し、「お父さん、どこ！」と姿を探す。「仕事に行っていますよ」「もう帰ってきますよ」となだめると「嘘をお言いな！」と険しい顔で突っかかり、椅子を押ししたり、机を動かしたり、誰彼となく食って掛かってろくろく返事を聞かずに激昂していくことしばしばであった。

それが、職員の高市さんを「お父さん」と認めてから、ヒサコさんは変わった。お父さんに甘え、世話を焼く。「トイレに行きませんか」と高市さんが誘うと、「えっ、お父さん、トイレに行きたいの？私がついて行ってあげようか」と心配して腰を上げる。高市さんがヘマをして叱られていると、「お父さん言われよんの、大丈夫かな…」と笑ってかばう。他の利用者さんにも、「あれはうちの主人です」と紹介し、「あら、そうだったの。いいですね。優しい方で」と言われ嬉しそうに、「いえいえ。頼りないところもあるけどな、まあまあです」と笑顔で応対し、利用者さんも信じ込んで話をしている。最初の険悪さが嘘のように、みなさんと楽しく談笑できるようになり、毎日嬉しそうである。

女性職員は「たづちゃん」と呼ばれる。たづちゃんというのは、ヒサコさんにとってかけがえのない友人である。「お父さん」と「たづちゃん」、頼りになる存在に囲まれて、第二ともの家は居心地の良い家庭のような場所になった。もう、机やいすをせわしなく動かし、帰る帰ると言って歩き回ることは無くなった。

ヒサコさんの例は、認知症の方にとって「落ち着ける」こととは何か、を示している。人は自分が全面的に受け入れられると感じた時に、安心して落ち着くことができる。「この人は信じて大丈夫」、誰も自分を否定せず、馬鹿にせず、いじめることはない。その時はじめて、そこが落ち着ける場所となる。そして人は、居心地の良い場所にいつく。はじめての場所はヒサコさんにとって、ストレスだったに違いない。だからなじみの人を探して回った。実をいうと高市さんは、ヒサコさんの「お父さん」に似ても似つかない。だが、ヒサコさんの「お父さん」になったわけは、彼が優しく穏やかで、ヒサコさんを受容したからだと思う。ただ必要なときに傍に居てくれる、ヒサコさんの望んだお父さんの姿だった。

私たちは、時として誰かの失った存在になることができる。それはとてもありがたく、かけがえのないことだと思う。そのことを心から理解できた時、本当に必要な人になれるのではないだろうか。みんなが「たづちゃん」「お父さん」と呼ばれるように、介護者は努力するべきだと思っている。



## いちご狩り



ともの家この道 崎田 憲司

4月24日（金）ともの家この道と小規模合同で、いちごファーム北条に出かけました。道中、道に迷うというアクシデントもありましたが無事に到着しまずは一安心。園内に入るとたくさんのいちごの苗が所狭しと並んでおり、ファームのスタッフの方からの説明を受け、皆「待ってました」といちごを摘みに出発されました。いちごを摘みながらその場で食べる方、コップ一杯にいちごを入れてから座ってゆっくり食べる方、一心不乱に持ってきたいちごを次々と食べる方、皆それぞれでしたが、口から出る言葉は皆「美味しい〜」「うまい！」と喜びの言葉と表情ばかりでした。帰り道でも「また行きたい」という声上がり、またひとつ来年の楽しみが増えました。



## 溝辺防災訓練

溝辺ともの家 福田清乃

3月に溝辺独自の防災訓練を行いました。

その日は生け花クラブの日で生け花の先生松下さんも参加していただき利用者全員八白公園まで無事避難することができました。

スタッフ3名+松下さん、そして利用者6名。

全員手作りの防災頭巾をかぶりスタッフが緊急避難リュックを背負い、玄関からと

裏口からとに分かれ、どちらが少しでも早く安全に避難できるかを試しました。

結果、裏口からタウンマートさんの横を通らせてもらい八白公園まで4分。

玄関からはどうしても車椅子の方が大半を占めるため、リフトを利用しなければなりません。災害時に停電等により動かなくなる可能性も考えるとやはり裏口から避難したほうが早そうです。

無事避難した一行は、後は遠足気分リュックにいっぱい



つまった非常食の試食大会とあいなりました。今時はカンパンなどのあまり美味しいとは言えない非常食ばかりではなく味にもこだわったものが沢山。近所の子どももよってきて。最期は記念撮影。実際災害があった時にはこうはいきませんが、まあ、訓練ということで。

これからもいつ何があってもすぐに避難できるように万全対策をはかっていきたいと思っています。



## 【お悔み】

上田芙二子さん 享年 84 歳

ご自分のことを「ばあば」と呼ばれ、「ばあば〇〇したい」「ばあば、いらん」などハッキリとご自分の気持ちを表現される方でした。少しのことでは動じず、「はははっ。じゃとお〜。」「どおすりゃいいの〜さあ〜思案橋〜♪」「わっかりましえ〜ん。」とユーモアたっぷりに返されました。何よりも外出が好きで起床するとすぐ「今日はどっか行くの?」とキラキラした表情で職員に聞き、その日外出がないとわかると「行かんの〜」とガッカリ。写真を撮ると「きれいに撮ってよ〜」と小首をかしげパッと明るい笑顔向けられました。



重い持病があり入居当時から亡くなるまで、本当にお辛かったと思いますが、私たちは上田さんのユーモアや明るい笑顔に救われることが多くありました。きっと今までの人生でもたくさんの人を自然と笑顔にされてきたのだと感じました。ご家族のお話では、同年代の方から若い人まで、様々な年代のご友人がいらしたそうで、そばにいただけで心が和らぐ方でした。

上田芙二子さん、たくさんの思い出をありがとうございました。 溝辺ともの家 大窪理紗

## 築山君子さんとの思い出 享年83歳 第二ともの家

介護を何も知らずに働き始めた僕が、認知症とパーキンソン病という難病を抱えた君子さんを通して色々な事を学びました。

最初のうちは君子さんに恐る恐る触れていたのを昨日の事のように思い出します。

慣れない頃は入浴も拒否され、トイレでズボンを下ろす事にも苦勞し、介護の大事な基本を教えてもらったのも君子さんでした。

そのうちにお風呂も抵抗なく入っていただけるようになり、少しは慣れてくれたのかな。と思っていた矢先の事で、本当に残念です。

普段は他の利用者さんに構ってしまい、物静かな君子さんが後回しになることもあったのですが、夜勤の時は二人でソファーに並んで座り、君子さんが口ずさむ歌をネットで検索し、歌詞やメロディーを調べ、二人で歌った事もありました。

僕の知らない歌をたくさん教えてもらいました。知っている歌は二人で歌いました。もっと色々な歌を聴きたかったです。

働き始めてすぐの頃、君子さんから「お父さん、どこ行った？」と尋ねられた事がありました。僕は「お父さんは今お仕事に行かれていますよ。」と答えました。すると僕の頬をつねりながら「嘘をお言いな！お父さんはもう居らんじゃろう！」と言われた事がありました。



僕は決してその場しのぎの事を言ったつもりはなかったのですが、嘘で誤魔化そうとした僕の心を読み取られたのかも知れません。

ついてもよい嘘、つかなければならない嘘、ついてはいけない嘘。介護の世界には色々な嘘があります。駆け出しで何も解らない僕が、不用意についた嘘。今でも忘れられずに僕の心の中に残っています。

これから先、そういった嘘の場面に直面した時、おそらくあの時の君子さんを思い出す事でしょう。

短い間でしたが、色々な思い出を作ることができ、また色々な勉強をさせていただきました。

本当に、ありがとうございました。

第二ともの家 渡邊 朋

## 成井テル子さん 享年 98 歳 第二ともの家

今でも、すぐそこに優しい笑顔を浮かべた成井さんの姿があるような気がします。成井さんは、小柄で穏やかで、決して自己主張の強くない方でしたが、その存在はとても大きなものでした。気分がすぐれず眉をしかめている方も、怒りまくって機嫌の悪い方も、成井さんを見るとほっこりと心が和み、「おばあちゃん」と話しかけるのでした。職員にとってもそうでした。柔和な顔に救われ、毎日の元気をもらっていました。「頭が痛いよ」と訴える人には真顔で「痛いの…」と心配そうに尋ね、「私のこと覚えている？」と聞く人には「さあ、どうでしょう」とにっこり。素朴な成井さんはいつでも真剣で誠実に、人に接していました。人柄がよくわかり、成井さんのように老いたいなあ、と誰もが思っていました。

第二ともの家に来られて2年と4か月、初めのころは自分でご飯を食べたり、起き上がったりがされていたのがだんだんと動きが少なく、よく眠るようになってこられ、口数も少なくなってきました。でも楽しいことが好きで、敬老会の出し物では一番真剣に最後まで見ておられたり、子どもを見るとかわいいのう、と目を細めたり、外出するととても喜ばれて、野外活動センターでのバーベキューでは二年続けてビールを缶のままごくごく美味しく飲まれたりされました。たくさんの笑顔の写真が、第二ともの家に残っています。

成井さんをご自分で寿命が来たのをわかっていたのだと思います。食べるとむせこむことが増え、「食べられない」時が来たと示されました。食べられなくなってからの一週間少し、娘さんも私たちもつらい思いがしましたが、医師の説明によれば食物を消化しエネルギーに変える必要があるため食べるのであり、もう身体にエネルギーがいらないとわかると、生命は自然に食べ物を摂らなくなる。そうすることで、楽に逝けるのだということでした。成井さんにまったく苦しみがないことが我々の救いでした。

ターミナルが決まった時から、私たちは話し合っ  
て自分たちが成井さんのためにできることを探しました。部屋替えて、横になってもみんなの様子が見えるようにし、毎日語り掛け、傍で過ごす時間を作りました。お花を飾り、加湿器を置き、アロマを焚き、写真を飾り、淋しくないように、残された時を快適に過ごせるように願いました。毎日体を温かいお湯で拭いて清め、新しい寝巻に着替えていただきました。誕生日には、枕元にみんなが集いハッピーバースデーを歌い色紙と花束



を渡しました。仲間たちから感謝とねぎらいの言葉を受けて、成井さんはとても幸福そうに微笑まれました。それを見て、皆も涙しました。

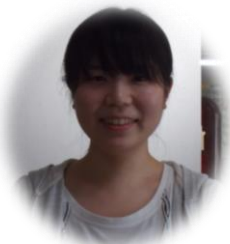
また、ご家族の力に励ましを受けました。容体が悪くなってから毎晩泊まってくれた娘さん。額に手を当てた時「信ちゃんか」と言われたのが私の聞いた最後の成井さんの言葉でした。成井さんが居なくなって、その笑顔が見られないと思うと、火が消えてしまったようにさびしく感じます。毎晩仕事が終わるとやってきてくださった娘さんの姿がないことも、淋しさに拍車をかけます。どうかいつまでも、第二ともの家のリビングで、その笑顔で私たちを見守っててください。ありがとう、さようなら。

第二ともの家 永和 里佳子



新人  
紹介

永易 沙織 (溝辺)



大塚 次夫 (小規模)



4月から溝辺ともの家で勤務しています。まだまだうまくできない事が多いですが、一生懸命がんばりますので、よろしくお願いします。

笑顔を忘れず、利用者の皆様に寄り添って利用者の気持ちを一番に考えられるような職員を目指して頑張ります。

高橋 直美 (溝辺)



笑顔を忘れず、焦らず、気負わず利用者様の気持ちに寄り添えるような職員を目指して頑張ります。

どうぞよろしく  
お願いします



ともの家では、未経験者優遇にて随時職員を募集しております。あわせてボランティアの方の温かいご支援もお待ちしております。

## ～自己紹介・ご挨拶～

事務長 永和 志野

今年度、事務長として、ともの家に赴任した永和志野と申します。今年の3月までは、横浜市の小学校教員として働いていましたが、このたび、縁あってともの家で働くこととなりました。そこに至るまでの人生の軌跡を簡単にご紹介しますと・・・



小学校から高校卒業までの少年時代を松山で、大学在学中の4年間を横浜で過ごしました。大学卒業後は、当法人の前身であるNPO法人ワーカーズコレクティブともの家の「溝辺ともの家」で介護職として約1年間働きました。その後、夢であった小学校教員として12年間、横浜の小学校に勤めました。自分で言うのもなんですが、とってもよい先生だったと思います。しかし、そんな順風満帆だった教員人生にも終わりがやってきます。ともの家の前理事長である父が病に倒れたという知らせが突然舞い込んできたのです。病に倒れた父と、それを支えながら父の代わりに法人運営

の舵取りを行う母であるホーム長。遠く離れた横浜で自分にできることは何かを考える日々が続きましたが、結論がでるまでにそう長くはかかりませんでした。父と母が自分のこと以上に大切に考えている「ともの家」で、少しでも力になれば・・・そんな思いで、大好きだった教師という仕事を辞め、松山に帰ってきました。事務長という立場上、利用者の方々と関わり合う時間は少ないかもしれませんが、自分にできることを増やしていき、現場の裏側から「ともの家」を支えていきたいと思っています。そして利用者の方々がこれまで以上に豊かに生活できるような「ともの家」にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



### 編集後記

新事業所開設に伴い人事異動があり、広報委員会も新しいメンバーとなりました。新メンバーによる初のともの家便りがやっと出来ました。産みの苦しみを経験し改めて『母は偉大なり』と感ずることができました。

先達たちが築き上げたともの家便りを劣化させ「先代に勝る二代目なし」と言われぬように精進したいと思います。

(T)